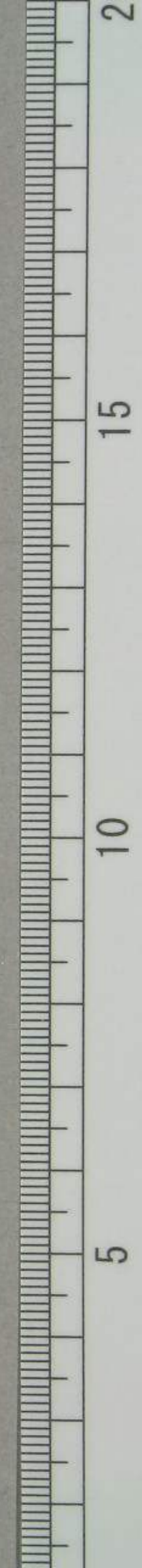


夏のおよび

かの子集
カニ編



夏後のなやみ

かの子集巻二編

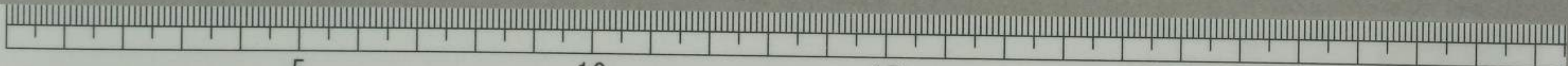


夏のなやみ

かの子集
方二編

夏のなやみ

かの子集方二編



5

10

15

20

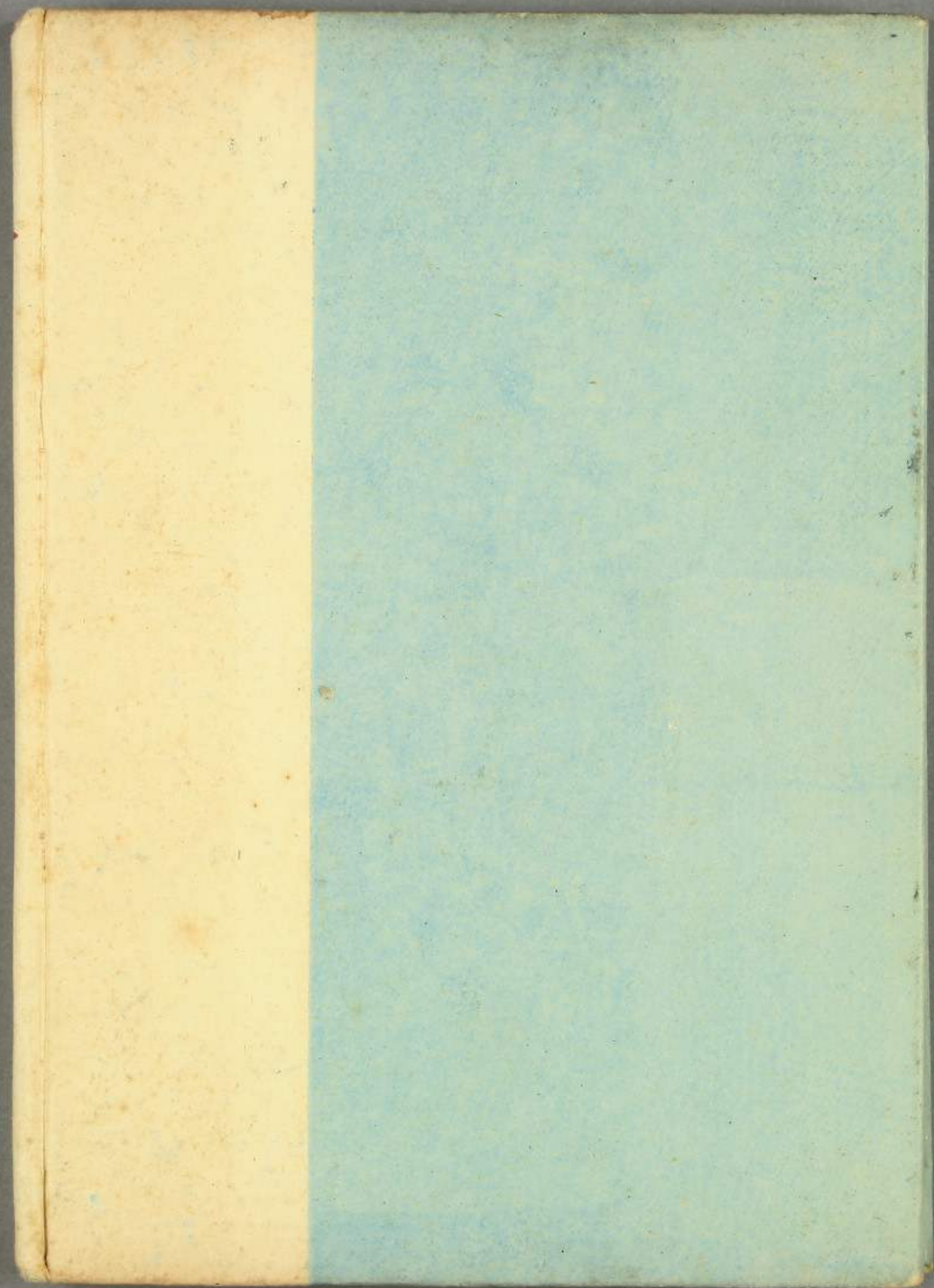
25

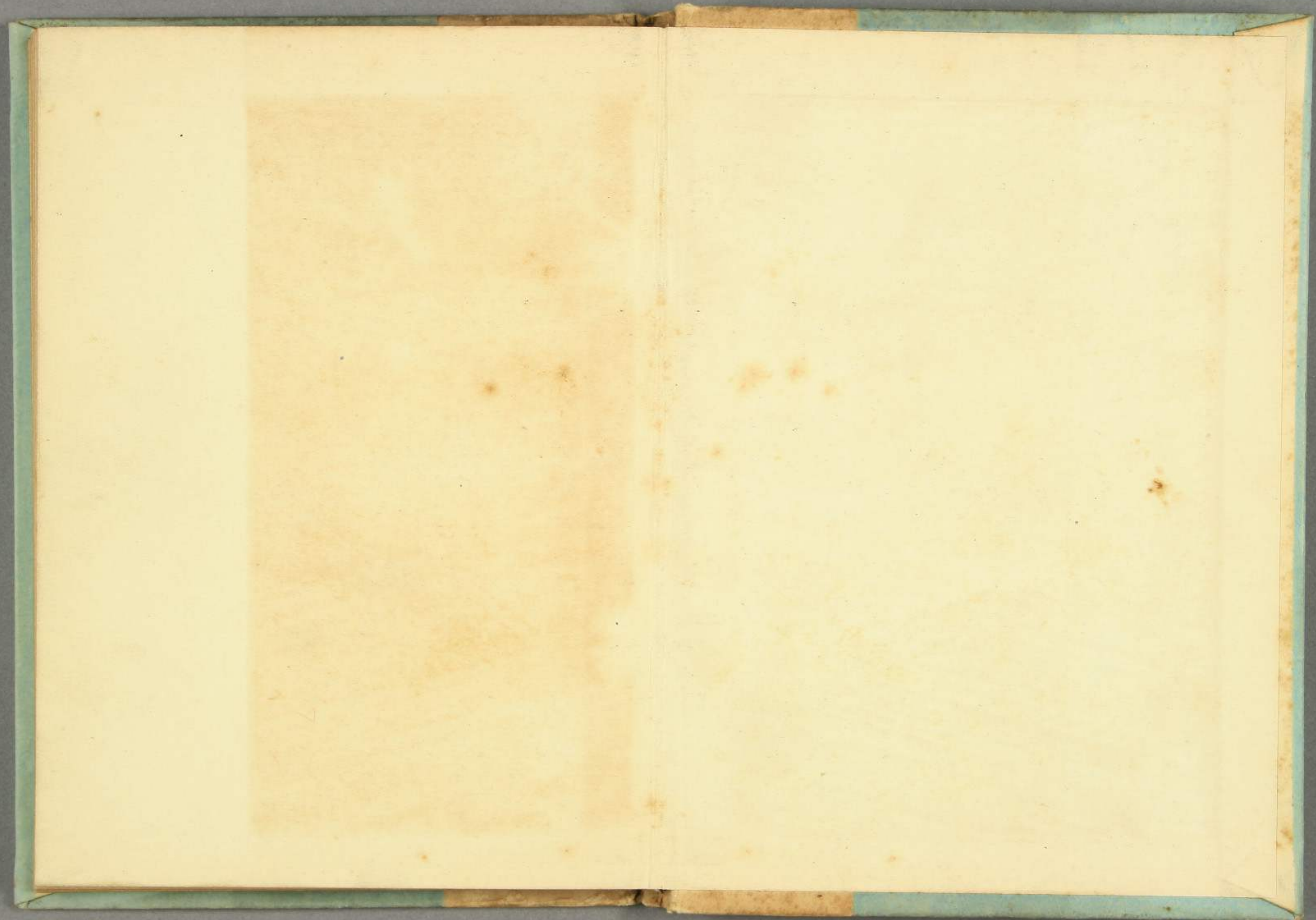
かの子集
カニ編

夏のなよみ

夏のなやみ

かの子集巻二編





歌集
愛のなやみ

岡本かの子

歌集
愛のなやみ

岡本かの子

東京東雲堂發行

大正七年二月

はしがき

愛はなやみなり。進めば囚れ易く、退
けばえ堪へず淋し。われ、これを求む
る情のかぎりもなくはげしきに、心
あやにくかよはくて、絶えずそのな
やみに傷む。

薄 去れる老婢 水
 厨にてうたへる
 君しあられば
 紀の國の繭
 仔犬の死
 人の死に
 眼をやみて
 小さき盲女
 こがらし
 針の狂女
 越路の狂女
 む 越路の狂女
 ん 越路の狂女
 れ 越路の狂女

四〇
 四二
 四七
 五一
 五二
 五三
 五五
 五九
 六〇
 六二
 六六
 六九

春 さむし
 遠 鶯
 春 愁
 あさみどり
 人より珠数をうけて
 歸り來て
 信濃路
 病める旅にて

木 哀 夜
 半 悼
 枕

【下巻】

六六
 六九
 七〇
 七五
 七九
 八二
 八五
 八九
 九〇
 九二
 九六
 九七

愛のなやみ 上巻

目次終	なげき	灯を細めて	かゝる点にし	ふるさ	君が性	芍薬	こるもがへ	暮るもがへ	女のなげき	冬のころ	晝のころ
	一六三	一五八	一五三	一五〇	一四五	一四三	一三九	一三五	一三三	一三九	一六六

初秋

秋立ちぬなれし門邊の小石すら數あきらかに眼
に讀まれつゝ

かりそめに病めるもうれしひそやかに今朝秋風
の立ちそめにけり

ほろほろと涙落つれどころよく悲み溶くる秋
風のなか

胸深くひそかに秘めし悲みを静かに秋の風の訪
ひ寄る

つゝましく小枕あてゝ我妻がねいる朝の初秋の
風

溶きさせる白粉の香にふとばかりさしぐまれけ
り初秋の朝

白粉もうすめに溶きてこゝろよく寂しくけはふ
初秋の朝

4
ちひさなる冴えし鉄に前髪の元結を切る初秋の
あさ

揃へたる指おまひの爪も美しく光れり今朝のこゝろ静
けき

わが瞳日ごとに澄みて冷やかに涙ながるゝ秋來
にけらし

たくましき兄弟のすむ故郷へ戀にやつれて歸る
君かな (以下六首傷きて歸れる人に)

しみくと戀にやつれし頬を撫でて泣くかや君
は故郷の温泉ゆに

故郷の温泉いづゆの窓に啼く鳥にしばしかなしき戀を
忘るや

かしましき故郷人のなかに居てさかしく黙す君
しおもほゆ

5
嘴はし赤き鳩の棲むてふ故郷の君が軒端も今暮るゝ
らん

6
故郷の山の緑の香を泌めてまたも都へ若やかに
来よ

さつきやみ

傘をもてる我手の白さにもおびやかさるゝさつ
きやみかな

何音か鋭くひとつはてしらぬさつきの闇にひゞ
きて消えぬ

7
雨晴れぬにはかに眉をうちひらき我許に来る君
にはあらぬか

別れ来て冷えし苺のくれなるをすゝる夜ふけの
 ともしびのもと

三味線のおせしうこんの袋のみうすら淋しく暮
 れ残る部屋

夕されば淋しくひとの我がどに立つけはひして
 月見草さく

傘の油の香さへ身にしみて淋しく雨の夜を別れ
 来ぬ

傘を持ち添へし手にまたしてもはらはら君が涙
 かゝりぬ

濃艶あでにして待ち居たる身の恥かしや疲れて君は
 かへりたまへり

七日ほど着なれて肌になづみたる衣なつかしや
 初夏の朝

君行きぬ獨みやこの街の灯に浴衣地などを選る
 よ淋しく

今日もまた我に文をば書きさして遠方の山など
見入れる君か

ぢぢりと痩せたまひけんやはらかに強き瞳に
まつはられつゝ

ゆくりなくさまよひて來ぬいさかひて彼の夜別
れし裏街の角

やせし犬さびしくひとつたゞずめり彼の夜別れ
し街角の灯に

我儘の妻にもなれてかにかくに君三十路男とな
りたまひけり

月見草

濛々と汽車のけむりのなびき行く山腹に咲く月
見草かな

のこされし淋しさなげく隈もなく君に都の灯は
や明あかけん

君泣けど都の灯ともしひとつだに消けなんとせてつれな
かるらん

都いま雨や降るらん君とわが種まきにける土ぬ
らしつゝ

語りつゝ泣きつゝ君と蒔まきにける夏草の種芽ぐ
み初めけり

ほろくゝと落ちし涙もそのまゝにうづみ蒔まきけ
る夏草の種

いかばかりかなしき草や芽ぐむらん泣きつゝ君
と蒔まきし種はも

蒔きにける我あらずして夏草の種よ淋しく芽に
出でにけん

もろともに蒔きしわれ無き淋しさを種ぞ芽ぐみ
て君の知るらめ

都邊の草も芽ぐまんかへり行くわれ待つ君も瘦
せたまひけん

何色の花や着くらん何草の種とも知らて蒔きに
けるかな

からうじて博多の帯もひとりして結び得るまで
病癒えけり（以下病衣を脱ぎし時）

前髪をかくさへたゆく力なき指もて折りぬひな
げいの花

かにかくに生きてみそばに幾年かまた添ひまつ
る身となりにけり

紅き花とぼしくなりし我髪にさゝれていかに淋
しくあらん

化粧疲れ

ほとばかり化粧つかれの腫を落す鏡のまへのひ
なげしの花

一すじの涙のあとの光りたる頬のまゝ君の眠り
たまへる

君去りし疊の上のぬくもりに頬をばあてつゝさ
めくくと泣く

君は今聞きわけもなくむづかれる我を脊にして
海を見入れり

泣きぬれし頬をばかくして夕暮の磯より宿の部
屋にかへりぬ

心中の男女がさまよふと人もこそ見め泣きやみ
たまへ

婢がたゞむ晝の着物をながしめに見つゝ旅宿に
夕化粧する

ちかめんの羽織の肩も潮風にいつとりとして磯
は暮れけり

つれなくも門の大樹はうそぶけりなげきつかれ
て我かへる日も

さらけと茨の垣のやはらかき芽にふれて行く
我袂かな

つと投げし紅き花さえ灰色の波にかくれて海く
れにけり

愛のなやみ

いやさらに離るゝは淋し傍に君美しうあるもな
やまし

いとせめてすこし心のなやみさへ落つるものか
と髪あらひけり

いみじみとまた君戀し洗ひ毛を脊に散らしつゝ
打ち黙す晝

なにげなく咬^{かみ}たる爪に口紅の薄くつきけりうら
淋しけれ

後れ毛を咬へても見つわけもなくさしぐむわれ
を慰めかねて

いかばかり淋しきわれに思はれて君が「若さ」よ慰
まざらん

かくばかり思はるゝ身になど崩すねたみなるら
んねたみなるらん

いたづらにねたむはつらし美しう優しうわれに
戀はしめよ神

いさゝかのねたみも知らておとなしく戀ふる故
にか君は美し

いかに我がわりなきかなやあてもなきねたみに
またも君を泣かせぬ

ほそぼそと蚊のなき出でぬ歎^{なげ}歎^りつゝふたり黙せ
る黄昏の部屋

涙まだかわかぬほどにほゝゑみのつと美しく頬
 にのぼりけり

すこやかに君を思ひぬばらくと白あやめ咲く
 夏のあけがた

停車場いでし二人の眸まぶをまづ青々ひたす若竹の
 丘

乗りすてし汽車の汽笛を遠ち方の野路に聞きつ
 疎林に入りぬ

後れたる君みかへれば新らしき帽に眞晝の光ま
 ばゆし

道ばたの草にほこりのやゝ白し黙して二人行く
 眞晝かな

握りたるばらゐの柄も汗ばみぬ都はなれて幾
 里來つらん

かたはらに我が悲しみも歡びも知る人あらで静
 けし眞晝

淡紅くなげいだされしわが足をみつめつゝひと
り病む晝の床

いつ癒ゆる病か知らず新らしき敷布をまたも更
ふる床かな

さつき晴れ

なめなめと解く黒髪とくれなるの苺の磁器に更
くる夏の夜

別れ来てかろき疲れにいこひたるすがくしさ
よ葉櫻のかげ

衣のいろ髪 of 艶さへなつかしくよみがへりける
さつき晴かな

傘をたしめばひとつくちなしの花のすべりぬた
そがれのかど

あてやかに傘させる女我門の泥濘道ぬかみちをゆきなや
みたる

花に置く朝露ばかりしつとりと雨にぬれたるわ
が小傘かな

あざやかにしやくやく咲きてふたつみつ傘ほせ
る梅雨晴れの庭

あてやかに君が面を照らせよと灯かけに置きぬ
ひなげいの花

ひとところ闇をいや濃く隈どりてひなげいの咲
く門にまちけり

前髪のふといもふれてくづれたる机の上のひな
げいのはな

脱ぎすてし君が帽子のふちのやゝ痛めるに先づ
さしぐまれけり

うつすいと帽にかゝれる塵の色いとしや君は疲
れてかへれり

ひそやかに呼吸づかひしてただひとりはかなき
ことをおもひつづけぬ

いつとりと袖もまつげもうるほひて甘き涙にま
どろみにけり

黄水仙

堪えがたく淋しきものを黄水仙銀の鉢など冷た
く光れり

黄水仙人に別れてやゝ老けし我が初冬のたもと
淋しも

もつれたる戀をはなれていかばかり君が瞳に海
廣からん

しどけなく黒くろちりめんをぬぎすてし閨にこぼる
 白梅のはな

むづかしき戀をはなれてやゝしばしまどろむ君
 に海な鳴りそね

風高く都どよもす夜ぞ君が枕に近き海も鳴るら
 め

荒磯あらいそ邊のなにをよすがに我袖の香をしも君はし
 のびたまはん

ねこやなぎ少し芽に出ぬしらくとわがのき近
 く淡雪もがな

ばらくと蜜柑の皮の散ばれる軒端に近く群雀
 鳴く

わがねたみあまりあくどくまつわりて君病む身
 とはなりたまひしか

許したまへねたまじ泣かじ今はただ優しく君を
 みとる女ぞ

ただすこし眼開きたまへいさゝかの看護みごりの暇に
化粧へるわれぞ

しばしだに肌はだはなさははかなくもまた冷えはて
んわが人形か

あゝ百夜いだけど君の美しさ冷たさはげに變ら
ざりけり

そのまゝに泣きてのみあれそのまゝにただ美し
ふ泣きてのみあれ

傷ける實

いたましく傷つける實をただひとつ摘みて佇む
紅苺畑

廢驛の雨

先きに行く君が俾の静やかにゆれて旅路もうら
安きかな

青白き巡禮の子のとぼくと小雨にぬれて暮る
る廢驛

廢驛のとある夕の軒に見し旅藝人のいたましき
群

廢驛の橋のたもとにただひとつ瘦せたる犬のあ
へぐ夏の日

廢驛の壊れし家の壁ぎわにあをくとしも繁る
夏草

なにとなく朽ちし香のただよへるたそがれどき
の廢驛の雨

君乗せて汽車は去りけり茫として青田のなかの
停車場にたつ

残さるゝ我身のつらさ残し行く君が悲しみひと
つにし泣く

ただひとつぬれたる頬のいやはてのほゝえみを
見て君車窓まどを閉づ

停車場の柱のかけに一しきり泣きたる後にまた
も見送る

しのび泣く君かい撫づる旅人のひとりだにあれ
今夜の汽車に

はらゝと車窓まど際に佇つ我髪に君が涙のかゝり
けるかな

我ごとくまためでますや我ごとく君戀ふる子の
旅にもあらば

下泣きつゝ我に別れて行く君と知らで迎へん越
の司等

かくばかり傷みやすかるこゝろもていつまで我
の生きんとすらん

別れ来てたゞむ袂に見出たる涙のあとにまた泣
かれけり

はるく／＼と行きぬるものか越と言ふ文字先づか
なし君が消息

君行きぬあゝ我まへに何物もあらざる世とはな
りにけるかな

われゆるに好める酒も断つと言ふ消息は來ぬ初
秋の頃

折々はひとつふたつの杯も重ねたまへや旅は憂
からん

ともしびを細むればふとやつれたる旅寢の君が
頬ぞ見えにけり

薄氷

晴れやかに薄氷ふめば早春の香をたてにけり我
くろかみも
ふと君がなげく姿の眼に見えてこころかなしく
薄氷をふむ
しみくとよべの別れのはかなさをくりかへし
つゝ薄氷をふむ

優しくも我がひとり寝の軒の端に一夜をかけて
はれる薄氷
梅が香の浅き門邊の薄氷を水色の緒の細齒して
踏む
うつむきてふとしもふめば泣きはれし赤きまぶ
たのうつる薄氷
洗ひ毛の二すじ三すじからまれる小ぐし落たれ
薄氷の上

去れる老婢

去られたるうらみも言はずとぼく／＼とこのあさ
門を出て行く婢はも

一すじのたゞ一すじの帯をまた結び更へして出
て行く婢はも

うら若き主が溶くなるおしろいの香をねたみた
る朝もありしか

かたちよき老婢が袖の紅絹裏よ昔しのぶかあわ
れなりけり

しかすがに老ひひがみたる婢がためにしのび泣
きたる夜もありしかな

美しき女の末のあはれさに汝が我まゝも許し來
にしが

ここ去りて汝が薄命の影をまたいづこに運ぶあ
われなる婢よ

美しきをんなの末の薄命を汝に見ることもつら
かりしかな

薄暗き厨が隅よ去りし婢がひそかに泣ける夜も
やありけん

かげのごと出でて行く婢の後姿のうらさびしけ
れ初秋の朝

若ければ弱ければとて老ひし婢にあなごらるゝ
もむしろうれしや

老ひし婢に氣をばかねつゝ君にさへ言葉すくな
き夜もありしかな

かなしみか憎みか知らず我まゝの婢も去るとい
へば涙ながるゝ

我まゝのせんなさに堪えて出しやれど汝が薄命
は忘れせじ婢よ

我がやりし古りし衣着ていづこなる主のくりや
にまた行くぞ婢よ

去りて行く婢の後姿をみつめつゝよれば柱の脊
に冷たけれ

たゞひとつ持てる包に婢よ何か汝をなぐさむる
ものゝひそめる

しかすがにいとしまれけり薄命になれたるごと
き老ひしはしため

形よく揃ひしまゝの老ひし婢が白き眉にも時に
おびえき

厨にてうたへる

いそがしくふところかゞみふところにおさめて
またも葱さざみけり

ふと泌みし葱の香に誘はれて迫れる涙ひたにあ
ふるゝ

じやがいかの眞白き肌に我指の傷の血しほの少
しにじむも

指の傷巻きつゝあればたそがれの厨の隅にこぼ
ろぎのなく

白菜を洗ふ我手の一すじの指輪しら〜光る朝
かな

過まちて指にあてたる鉋丁の薄齒つめたき厨の
夕

脱りしまゝ忘れて置きし黄昏の厨の棚に指輪細
しも

引窓の薄き日ざしに美しくみがきし釜の光る朝
かな

引窓の薄き明に君がふみ見つ飯煮るくりやのゆ
うべ

やゝ荒れしわが手いとしや君がため飯煮るわざ
もふたつきあまり

あやまちて我落したる金簪の細く澄みたる朝の
水瓶

門づけを門に弾かせてたゞひとり厨に飯を煮つゝしぞ聞く

脱したる櫛の端をいつかまた噛みて厨の隅にしぞ泣く

いつそいと厨にひそみ我聞くを本意なげにひとり弾くやかどづけ

忘れ居し小唄もいつか口の端に出てゝしみじみ衣そそぎけり

君しあらねば

うちひさす都にありてかくばかりなげかふはわれひとりなるらん

うちひさす都をかくも淋しむも離りて遠く君ゆけるため

君行きし北どまことのうちひさす都なるらめこのさびしさ

うららかに都の空は晴れたれど君しあらねば仰
ぐともせず

紀の國の繭

美しき高野の山のやますぎの箱にかこみて繭送
られぬ

節高き男の手して飼はれたる蠶この繭ことしも見え
ぬ優しさ

名も戀もあきらめはてゝ優しくもかなしくも君
蠶こをば飼ふとや

見てあれば見てある程に白玉の繭めづらしくいとしくもあるか

いかばかりちひさき蠶らの優眉に君がかなしき
 ころ和みし

つゝましく泣かて歌はて蠶があみし繭見て涙し
 づかに降る

つゝましく泣かぬ歌はぬ蠶がころかなしくこ
 めて繭あまれけん

君が飼ふ蠶らや静に桑食みて春雨しけん紀の國
 の夜半

ほのぐらき夜半の灯かげに幾度か桑切る手止め
 君の泣きけん

誰がために繭をばあみて誰がためにほぐれて糸
 となるかや蠶らよ

ちひさなるわが驚を前にして繭つぶらかになら
 びたるかな

あきらめて蠶を飼ふほどの優しさを誰が戀故に
 覺えたまへる

なにごとか秘めしところを打ち出でゝかなしき
 まゆよわれに泣けかし

仔犬の死

我が生みし子のごと君のめでませしいとし兒犬
 は死にけるかな

夕されば君待つ門に我よりも先に佇む汝なれなりし
 かな

或時は二人がなかのいさかいをいぶかしげにも
 見てありし汝

君待つと寄りし樹蔭に捨てられてありしのみさ
へいとしきを汝

やりもせぬ乳なりしを汝がふところに居ねば乳
もさへ腫るかとかなし

昨日まで我が小庭邊のだからあの葉蔭に汝の戯
れてしものを

あまりにも可愛ゆきまゝに汝を籠めて外にやら
ざりし我なうらみそ

死にて行くものと知りせば野に山に放ちて戯る
ゝ汝を見にけんを

戸閉づればひたすら泣きて細き尾に閨の戸打ち
し汝なりしかな

早やさめて外の面に汝が待つけはひ覺えいそい
そ起きてしものを

戸をくれば庭の樹蔭ゆまりのごとまるびつゝ吾
に馴寄りしものを

覺束なく我が造りたる犬小屋に寝ほけし汝もいと
と見し朝

敷やりしふとんに散れる眞白なる汝が落し毛も
いとしとひろひし

かへすべき言葉も知らて君がまへ汝を抱きしめ
てひた泣きしかな

淋しさに汝を抱けば眞白なる毛並にわれの涙ま
ろびし

汝が行くは瞑府のいづくぞ人の子はさ、いのかは
らに石積むとふを

今ぞ汝わがふところに安らかに死ぬかや生みの
母も求めて

次の世は人身と生れて我が乳をも吸へかし我に
ものも言へかし

いかならん宿世ぞ人身のわれに汝は母のなげき
をのこして亡せぬ

おごそかに迫る死のまへいかてかは人身ひとと汝と
ことなるべしや

いろがねの鎖一すじ初秋の軒端に残し兒犬果て
けり

人の死に

君病みしこのひと夏のひぐらしのなく音ぞわき
て淋しかりしか

君亡せぬのこされて泣く人々の眼にはかなくも
こすもすの散る

いづこより死の來て君をいづこにか誘へる夜半
の風のかそけき

たゞひとり死にし君のみ安らけき秋にもあるか
 な人はみな泣く

寂しきやと問へばうなづきさしぐみしみ眼なる
 よ君つひに閉ぢしは

孤獨ひとりしてなど現世にあられんと泣きしをひとり
 ましてよみ路に

死のまへの君が戀ゆゑ傷ましく寂しかりしもこ
 とわりなれや

眼をやみて

せきかねつとゞめかねつゝ別れたる後の涙ぞ眼
 をいためけれ

何も見じ君と別れて眼を病むがなかゝにこそ
 うれしかりけれ

65
 しばだたさうちしばだゝき病める眼のかわきも
 あへず君想ひつゝ

君行ける空いづこぞと仰ぐさへえこそかなはじ
病みいたむ眼は

いとめさへ君の見えずて病める眼につれなく空
の晴れにけるかな

逢ひたやと泣く涙みな毒としもなりて我眼のい
たみ續くか

病める眼にうらなつかしくやはらかくたそがれ
の來て月見草咲く

病める眼にそつとのぞけばたそがれのくさむら
がくり咲けるしらぎく

一滴の水薬やゝに泌みて行く病む眼閉ぢつゝ虫
の音を聞く

虫なくよひとり都にのこされて病める女を知る
や知らずや

水薬と涙のしみの交りたる紅き手布も眼なれて
ぞ病む

眼とづれば一しほ我になつかしく親しく近しな
く虫の聲

君來まさを宵のまゝなる羅ろにやや肌寒しこほろ
ぎの聲

小さき盲女

いづこよりいづちへ行くや日毎わが門邊の落葉
ふみて行く盲女

初冬の日ざし淋しも裏街を靜に盲女が笛ふきて
行く

笛の手をしばし止めてうつむける盲女よ何をか
ふとあもひ出し

あはたゞしく小鳥たてるに驚きて冬木の梢を盲
女仰ぎけり

新らしく結べる髪に手をやりて折々盲女の笑み
つゝぞ行く

新しき盲女が裕よその母やえらべるその姉や
縫ひける

母あらばいかに悲しく日毎汝が出づる後姿見つ
つし泣かす

盲し眼の憂さしかすがにあきらめてひと癒すべ
く笛吹くあはれ

いくたりのなやみいやさばとこしえに汝が盲ひ
し眼の閉づる日は來ん

たゞひとめ見せたや汝が結びたるなえしもよう
の帯の色だに

ゆるびたる緒の下駄の齒に小石などまるばしつ
つ盲女の笛吹くあはれ

ここにぞよ汝をあはれみて涙ぐむ我あるものを
泣かず行け盲女

こがらし

吹くよ吹くよ木枯吹くよなつかしや寂しやひと
り涙ながるゝ

まるび行く落葉の如くこがらしの外にや出てな
ん涙垂りつゝ

眼を閉ぢて爪弾く三味の音も折々かすめて吹く
よ夜のこがらし

いつしかも我や歎^す歎^すれりこがらしの外^がの面^もにす
こし静まれるとき

五百重波とほきをましてこがらしの吹き隔つな
りかなしやな君

しのび來る人待つ夜にもあらねども靜心なやこ
がらしの音

こがらしの吹きのをにくく持て去られいづこの
扉にか寄りて泣かまし

ともに泣く人もや座せるこがらしのすさべる森
に見ゆる灯のもと

風の音のなつかしけれど眼にも見ず手にもとら
れず人の戀しや

語らずもよしたゞ頬をつとふ涙だに拭ひてくる
る人のあれかし

啼き啼きて秋虫はみな死にけるをなほわれ泣く
よこがらしの夜半

寝んとして帯をたゞめば帯の上にまたも涙のあ
ふれ落つるよ

何氣なく化粧ひても見つさはあれど出でて逢ふ
べき人しもあらし

たづぬれどさぐれどここに君はなし外の面には
たゞこがらしの吹く

海行かば波高からん陸行かば土凍りてんさあれ
逢はてやは

一日だに離るはつらや人の身の命みじかし生き
の日少なし

君もなく我また死にし後の世のこやこがらしの
吹きすさぶ夜か

針の手

いつの間にかふと針の手を忘れしや忘れて何を
おもひ居し我ぞ

山茶花のうらさびしげにつましく咲けるよ今
日はわれも針持つ

いとせめて目にあえかなる布刺さば少しなぐさ
むわが淋しさか

針持てばいつか小鳥の我軒に来て鳴く冬のあた
たかき晝

わが指の針もいつしかしくしくと泣くかとぞお
もふ胸のいたけれ

戀しさも悲しさもまたあきらめてもつれし糸を
しばしほぐすも

あふれ来る涙おさへつとどめつゝ實にこの衣も
幾夜縫ふらん

あまりにも思ひなげなや新らしき襟ぞ揃ひぬこ
ころ憎けれ

糸くづをそろへても見つ三筋ほど紅きをなかに
數へなどして

雲見れば雲静にもたゞよへりと見る間にまたあ
ふるゝ涙

越路の狂女

狂へるがゆゑさは美しき君なるか美しくしきゆゑ
さは狂ひしか

狂へるまゝ美しきまゝ君もまた廿年あまり七つ
重ねぬ

美しき越路の狂女に白雪のかゝりて冬はまたも
來にけり

君ひとり狂ふもよしやあまりにも美しくして揃
ふ家族うかたに

春は來ぬ雪消の水に美しき越の狂女の衣そゝぐ
らん

かゞやかに雪降りしけばいやさらに狂へる君が
眸まぶたこそ冴ゆれ

いちはやく雪間の春菜摘み採りぬ狂ふひとゝも
見えぬあはれさ

籠り家の窓邊に座して破れ鏡狂女はのべぬ雪晴
れの朝

何ゆゑに君狂ひしや年毎に越路の雪はたゞ深く
して

おとなしき狂女が髪のかんざしのゆらくゆれ
て冬あたゝかし

しかすがに狂女が髪の眞白なる元結も冴え春さ
りにけり

打ちもだす狂女がそばに冬一日座して小鳥の音
に聞き入りぬ

おとなしくうなづきつひにさしぐみぬ狂へる君
になど強いにけん

いつしかに狂へる眸に我が氣色よむも覺えぬい
としやな君

荒るゝとき泣く時よりもひそやかにもだせる君
を見るぞかなしき

みぞれ

いつしかに凍てたる土にいさゝかのみぞれたま
りて薄き日させり

薄紅き手に帚持ちいさゝかのみぞれ散りたる軒
端をぞ掃く

ひそやかになげくことあり折しもあれみぞれい
さゝか散りかゝる朝

春さむし

枯草の下にはつはつ若草の芽ぐむをふみて代代
木野に立つ

一にぎりの枯草ちぎりしみくくと揉みつつ居つ
つ人し戀ひ泣く

春寒しこの代々木野の枯草を藉きて蜜柑をたゞ
ひとり吸ふ

あやにくに吸ひし蜜柑のすさにさへ泣かるゝば
かり心傷めり

たゞひとり草をし藉^しけば代々木野の遙を汽車は
風のごと過ぐ

たゞひとめ汽車の窓より見をこせし人さえ戀し
春寒の風

ふたつみつ土筆を折りて代々木野をまたも寂し
くたちいでにけり

野も山もあまり明るし薄暗き軒に鳩棲む我家戀
しも

遠 鶯

張りたての障子明るしこの朝の遠鶯の音こそ冴
えたれ

春愁

遠人よ今日もほのく　我軒に櫻咲きつつ春の日
暮れぬ

山ざくら一枝折り来てほのぐらき厨に置きつ飯
をしぞ煮る

水瓶に一枝活けたる山ざくらほのに散りつつ厨
暮れけり

ひそやかにまたのがれ來ぬ山櫻一枝ましろき夜
の厨に

櫻花散りもしくらん眸ふせて人想ひ行く君が旅
路に

ともすれば群をはなれて黙し行く君に落花のい
やしげからん

91
新しき紺の脚絆を結ぶ手にしめやかに散る朝櫻
かな

緒の切れし下駄たゞひとつたそがれの軒にのこ
りて花散りかゝる

我涙かくす隈さへあらずしてあまりに春の明る
きかなや

朝櫻また泣きはれし瞳をあけてこのあかつきも
我あふぎけり

泣きはれし瞳にこちよや朝櫻ふくみし露のし
たたりもせず

たわくと咲ける櫻の下ふかみまだこのあした
人しふまずも

たちぬれて人戀ひ泣かん露重きこの朝ざくら風
渡れかし

朝ざくら露まだ重し二つ三つちぎり来て曉の床
に入るかな

はるけきをまして櫻の花しげく散り敷き閉ぢて
人なほはるけし

この春のひとりとなりし我に散る櫻ふっきのい
やしげきかな

さくらばな明るき晝の窓近く置きもかねたるわ
が荒れし手よ

あさみどり

我が干せる衣の裾よりしたたるるしづくにも染
むあさみどりかな

あさみどり若き楓の木の間より白き腕のもの干
せる見ゆ

戸をひとつ長さ廊下にひく毎に暮れまざるなり

卯の花の垣

卯の花の垣も暮れけんたゞひとり灯かげに座し
て君も待つらん

道の邊の夜の白うつぎ君置きて出て來し悔ひも
やゝ淋しけれ

こまかなる草の葉みつめあるほどにまたさしぐ
みて人戀しけれ

我干せる衣も乾あえず降る雨にみつめて淋し丹
つつじの花

丹つつじの陽に照れるさへものかげにおもひ沈
めば眼にまぼしけれ

君が妻の眞白さ指に練られたるよもぎが餅のつ
やぐしさよ

武藏野の春の香ぞする薄青さよもぎが餅を齒に
しあつれば

武藏野の小草の間より君が女がよもぎ摘みとり
ねりけんもちひ

武藏野の雨の夜ふかく君が女の手造りにけんよ
もぎ餅かも

わがために餅練る君が女のかたえ夜ふかく君も
歌や書きけん

人より珠數をうけて

手にとらん胸にや置かんあなかしこ晶たまの珠數こ
そ受けは受けつれ

ふしおがむ方は知らねど水晶の珠數爪たま繰れば何
か畏し

秋風のさやけく通ふ部屋うち内に水晶の珠數光るう
れしも

うたゝ寝の枕邊に散る紫の珠數のしめ緒のなま
めかしさよ

小さなる水晶の珠數なにげなく袂に入れし初裕
かな

枕邊につめたく光る晶たまの珠數置けども切に人の
戀しき

今日もまた寂しきまゝに秋風を聞きつゝ珠數の
晶かぞへけり

み佛にまもらるゝわが戀としも思はざりしに珠
數こそうけつれ

晶の珠數かけしまゝなる手も解かて人戀しさの
胸いださけり

かへり来て

つと押せば扉の小鈴りんりんと涼しくも鳴る愛かな
し吾家よ

つひに我が歸るところに歸り來しうれしさしば
し門の扉に倚る

しみくゝとわが家の土間をふみにけりすりゆが
めたる旅の木履ほづりに

かへり来て我家の飯の一碗をふくめばまづぞ涙
ながるれ

かへり来て貧しき庭に見出たる萩が小枝ぞまづ
愛しけれ

愛かなしくも旅寢の夜々の木枕にくせづきもせてわ
が黒髪よ

かへり来て萎なへたる旅の衣干す小庭邊わたる初
秋の風

薄赤く腫れし踵かかとをさすりつゝ、昨きのうの旅路の思ひふ
かしも

信濃路

あまりにも都はるけし山幾ついつしか越えて信
濃に來にけん
荒くれし男女のわが汽車に乗るもわびしや野州
の夕

さらくゝと唐きびの葉の風に鳴る野州平に停る
わが汽車

君戀し都戀しや信濃なる汽車にしてかむ飯の硬
さよ

かむ飯の硬さよいかに信濃路の都おとめにかく
はつれなき

硬き飯かみもかねつつさしぐめる瞳にさむき信
濃路の月

竹の箸また持ちかへつ信濃路に硬き飯かむひと
り旅かな

荒くれし信濃なまりの女らに交りひそかに湯あ
みするかな

信濃なる温泉のかほりわが肌に泌みて旅寝のや
やさびしけれ

千曲川風なつかしく旅にしてやや黒みたるわが
頬吹きけり

わがひたる温泉の窓ゆ見はるかす千曲河原の月
見草かな

たゞすこし稚茅ちがやが刺せる傷にさえさしぐまるる
もひとり旅かや

細々と枝かわしたる落葉松からまつの森のあなたの遠淺
間山

山蟻の群るゝを見つゝ信濃路の落葉松に寄り君
戀ふるかな

寄り来れば拂ひもかねつ山蟻の掌たなごしにのせ愛かなしと
ぞ見る

病める旅にて

やはらかき東海道の春色も病めればいたく胸に
こそ泌め

山北の山の麓の驛に咲く驛標の根の丹つゝじの
花

語りなば淋しからましなつかしくあらましと見
し人も居りけり

われひとりみてや過ぎけん驛近き小笹がくれの
細き眞清水

連りて暮るゝ箱根の峯峯もかぞえ疲れて都戀し
も

伊豆の山その溪峽たみやまの一つ屋のはたごに病みて君
し戀ひ泣く

君戀ふる心に泌みてやゝ寒し伊豆の深山に掬ぶ
眞清水

卯の花を手折れば溪の激流にほろくとしもこ
ぼれけるかな

せきれいの静かに尾振る溪峽の岩が根に咲く丹
つゝじの花

底遠くかすけく細き谷川を掩ふ葎にまじるまで
しこ

瘦せし頬によすれば露のやゝつめた伊豆の深山
の曉までしこ

露もまた乾あえぬ花を折りて挿す山のはたごの
病める枕邊

あかつきのみちし温泉に影さして窓邊横ぎる山
小鳥かな

たゞひとり湯槽にひたり瘦せし頬をまたしみじ
みとかいなでてけり

山の湯に浸り疲れて現なく聞くやさつきの晝ほ
とゞぎす

湯疲れや浴衣の上に羽織りたる黒ちりめんも重
しなやまし

湯疲れやまた現なくたそがれの旅宿の隅に三味
爪弾くも

わが弾ける三味の音さえまつわりしなやまし淋
し湯疲れの身に

湯の宿の晝の疊の冷さにこころよくこそ熟睡し
てけれ

なつかしき都のたより散ばれる旅宿ヤドの机どによる
や湯あがり

病みやせしわが俤おぼのうつるなる鏡かがみにならび挿す
や山百合

向つ邊むかひに白き藤垂れこの岸しづみにわが瘦せうつす溪
川の水

愛のなやみ上巻終

愛のなやみ 下巻

下巻は上巻より二年程前までの歌のなかより集めたり。
われ二年のあひだいたくも病みて歌なかりき。

夜半

しのび来て入りもかねたる君ありや門邊しづかに風わたる夜半
 味氣なき人の群より遠方の君思ふことの淋しさ
 うれしさ
 つと涙おさへんとして左手の指環つめたく頬に
 ふれにけり

常よりも優しなつかし今日のわが涙にうるむ眼
 にうつる君
 君かはた我が眸まみよりかふと面おもてあはせけるとき落ちし涙は
 つややかに涙のあとの君が頬をてらし出せし街の
 のともしび
 秋立ちぬ悪どきまでに黒髪の濃き友をややうと
 みそめけり

いま一度よびても見んかほそぼそと肩を落して
かへる後姿うしろで

大人びて薄く髭など目立ち來し男かはゆし初秋
の風(弟に)

秋のかせ飽かずあせらず静なる情とふたりなり
にけるころ

この夜ごろ言葉ずくなに寄り添ひてあるがうれ
しやこぼろぎの聲

やはらかく拭はんひとのかたはらにあるに甘ゆ
るわが涙かも

哀悼

(故大貫品川氏の靈に捧ぐ)

武藏野の疎林のなかの一すじの道はるばると君
は逝きけり

「死」を怖れ「死」を咀ひたる若人を試みんとて「死」は
誘ひぬ

煙草のむ暇にも「死」をば怖れたる君のなどてや死
をば招ける

武藏野の雑木のなかの一ひらの白銀しろがねの葉は散り
失せにけり

武藏野の秋の夕の寂しさを誰に語らん君逝きし
のち

何處より残されて泣く人々のいたましさをば君
は見ますや

君奪りに來し「死」の手をば玉川の流れもつひにせ
さかねけるや

玉川の流れの末の末とほく行かばや君の魄に逢
はむと

眞白なる石に交りて君が魄ありやとまどふ川邊
あゆめば

袖ひぢて秋の夕の多摩の水掬べば君に逢ふ心地
する

奪はれし君をなげきて病む我のしり後にまたも「死」の
ひそむかや

嚴かに君がつけたる足跡を見つめたるまゝ涙す
るのみ(遺稿に對して)

武藏野の秋の夕風すすり秋つゝ冷たき君がみ墓邊を
吹く

木枕

君もまた覺めて旅籠の襖繪の古き泌みなど眺め
たまふや

かへり來て我がかたはらに泣きたまふ日あらん
今は何もとがめじ

山深き旅籠の古き木枕のかたきをいかに君なげ
くらん

一人して山路をたどるあはれなるその面影のま
ゝかへれ君

君いまか秋の夕陽に頬も衣も紅に染めつつ山路
たどらん

優しくも君が袂にかくれ來し秋の旅路の一ひら
の葉よ

君泣きてかへりも來よや木枯のかく淋しきを旅
に堪えじと

晝の月

黒き鳥つぶての如く落日の強き光をよこぎりて
過ぐ

めさめてはまたうとうとと眠續くるあひだを綴
る春雨の音

あはれなり男やもめの厨よりたそがれ起る庖丁
の音

さらさらとカンパス走る刷毛の音に交りて窓を
うつ霞かな(アトリエにて)

春の日の光しづかに大地のものゝかほりを味ひ
てあり

煤けたる太き煙突あまた立つ巷の空にある晝の
月

ほろくくと落花のごとく涙散る春の夕の我がま
ぶたかな

すきもれし灯かげ一すじやはらかくめぐみそめ
たる草にながるる

冬のころ

さと開けて窓より雨をながめけり二人涙にぬれ
し眼のまま

かへり行く人の姿をにじませて薄墨に降るたそ
がれの雨

泣きぬれてかへるにうれし夜の雨傘ふかくと
頬をかくしつゝ

ふくみたる蜜柑の汁の冷さも冬の心に泌みてな
つかし

何處にかわれ怨みつゝ寝る人のあればか寒き夜
毎なるらん

いたましく泣きくづ折るる心をばいかにさとし
て寝ん冬の夜を

やうやくに肌のぬくみの溶けて行く紅絹もみの寝衣
の裏ぞなつかし

静かにも君おもひつゝ籠りなん好める色の衣な
ど着て

しくしくと蟲齒のすこしうづくさえなつかし君
を思ひ伏す夜は

わびしくも待ちつかれたる眸まぶにしむ細き指輪の
冷たき光

齒のいたみやうすらぎてたそがれの雨すゞし
くも降り出でにけり

ひとゝころ見つめてあればほろくゝと何かも知
らぬ涙あふれぬ

偉なる事業わざに向へる心もてこの淋しみさに打ち勝
たなまし

指先の針ほどの血に張りつめし心ふとしも破ら
れて泣く

鈴蘭の薄ら冷たくつつましき情もよしとくちづ
けにけり(鈴蘭を贈り來し人に)

女のなげき

今日もまた何故となく涙ぐむ眼を伏せしまゝ夕
となりぬ

美しさ若さをほこる寝姿の心憎さよつと刺して
まし

をんなのみ持つなげきぞと知ればこそ秘むれか
なしくうらなつかしく

春の風やや氣色ばみ出て、行く人の後姿ゆるやかに吹く

暮 春

黒ぬりのかるき木履のひよきにもほろくと散る山吹の花

晴やかにもの言ふ胸のいづこにかしくしくとしも泣けるかなしみ

かひ撫でて我さへはやもさしぐみぬまことわりなき汝が弱さかな

しとしとと雨も降り來し春の夜をいかにさとし
てかへしやらまし

二つ三つ言ひ交しては故もなく涙ぐむ眼を山吹
にやる

眞白なる素足の爪に血のすこしにじむも知らて
語り來しかな

何事も云はでさしぐむ君と我が幾まがりせしか
らたちの垣

開かれし窓いたづらに明らして君無き部屋に來
てひとり泣く

はしたなしと叱りたまはゞいかにせん待ちつか
れたる後のうたたね

ひなげしも我が黒かみも燃えさかる初夏の日と
なりにけるかな

後れ毛の去年より増せし生際もなつかし夏のそ
よ風ふけば

しのびかに我をしたへる腫の如き灯をば見出て
ぬ若葉の奥に

別れ來しこのやるせなき心もて灯明き部屋にな
ど入るを得む

ころもがへ

庭草に水などやりぬめづらしく優しく君を送り
たるあと

衣更へ庭木の葉かけ青く泌む小座敷こそはすが
すがしけれ

まだ知らぬ海を思ひぬやはらかに波打つ君が額
髪を見て

淋しげに光る小諸の城近き鐵のレールの今も眼
に見ゆ (旅の追憶の記より)

やはらかく戀に我が瞳もうるむころ地に若草も
めぐみそめけり

ほしいまゝに己がなげきをのみ告ぐる君のふと
しも憎ふなりぬる

逸早く青桐の葉は音をたてゝすすしき朝の雨を
知らせぬ

漸くに青葉の色の濃くなるもわが黒髪のみすも
なやまし

責めたまふ君がみ膝に涙ぐむつぶらなる眼をむ
けて黙しぬ

芍薬の花一りんの明るさも眼に堪えぬほど病み
つかれけり

あまりにもわれをば知りて何事も許したまふが
やゝあきたらじ

ほたぐいと梅の實落ちぬやふやくに涙をさめし
たそがれの窓

あざやかにひなげしの花うつるなり泣きはらし
たる後の瞳に

芍薬

猫の尾の一すじ白きそれもまた消えてはてなき
さつき闇かな

足にややかたき鼻緒の水色を見つめつゝ待つた
そがれの門

ひとゝころ障子あかるくまどりぬ梅雨晴れの
日の芍薬の花

黒髪も袂も朽ちば朽ちはてよぬれつゝ梅雨に待
ちつくसानん

別れ来てひとり静かに齒のなやみいたはる夜の
雨の音かな

君が性

我と我が病みほけし身のいとしさをいたはらん
とて臙脂べになどさしぬ

美しく君を待てよと袂など揃へ賜ひし母なりし
かな

いかばかり君を思はば我をのみ思ふ君とはなり
たまふらん

なやましき戀とはなりぬうらめしさねたましさ
などいつか交りて

彼^あ方向きのうなじの毛やふるへるは風かひそ
かに君の泣けるか

またしても怖^{おそ}びてまことを語り得ぬ弱きが君の
性とゆるさん

頬のあたりすこしやつれて旅路より君かへし來
し夏のあかつき

かへり來て旅のつかれに君寢入る夏の朝の緋葵
のはな

いかばかり淋しく我のありとても君が旅寢をな
どてのろはん

夕されば君が旅路の山裾にはたぐい咲かん月見
草など

別れ居て淋しさ満てる瞳にあまり晴れたる空の
打ち續くかな

薄あかき片頬を見せて朝寝あさいする君をゆたかにつ
ゝむ青蚊帳

たそがれの底にただよふほのかなる青き疊のか
ほりなつかし

またしてもうつむきがちに寄り添ひて何事をさ
はわぶる汝ぞ

ふとあぐる面にあたる薄あかりいつしか空に月
の登れる

安らかに君がねむれるかたはらになど他事よそごとを思
ひ泣かれん

何事も忘れて淨く美しく我の添へるに安ふ寝た
まへ

ふるさと

のがれ來しこの故郷も母亡きを兄亡きを知るか
 なしき家ぞ
 母君よなどておはさぬ都より美しうして娘のか
 へれるに
 心なく折りては捨てし月見草いまは母への手向
 にと摘む

大輪の日向葵のはな二三りん先づめさめたるあ
 かつきの庭
 君行くや行きてかへらぬ君とにはあらねどもな
 どかくは悲しき
 君が行く百里の旅の山川よ君が瞳にすがすがし
 かれ
 あやしくも都のかたをながめては泣く子よと汝
 が母おもふらん

遠方おちかたに君泣く夜かや故知らぬ涙ながれてとどめ
かねつも

美しき言葉もてのみ語らひし彼の一時の後の淋
しさ

かゝるゑにし

蝉いとどく々泣きて誰をば待つ汝なれぞ泣きて誰をばうらむ
汝いましぞ

みな可愛われに馴れ來てものすべてあはれか愛
くなつかしや秋

しみじみと女なる身のなつかしさかなしさ覺ゆ
乳房いだけば

うすぐらき納戸の隅に亡き母のおはぐろの香の
ただよへるかな

なみくくと胸に満ち來し悲みのあふるゝやとて
聲さへ立てず

晴れやかに障子張られてなにとなく親しみにく
き部屋とはなりぬ

憎むべき人を憎しとおもひ得ぬ我がこの頃のは
がゆさよ實ひに

新らしき木の實の肌はだに齒をあつる病後の秋のす
がくしさを

なにとなきあこがれごちふと空を仰ぐ瞳の色
もあまへぬ

別れし日遠くもあるかなつかしく寂しき秋もは
やたちにけり

かりそめの素足の傷にひえくと薄き血しほの
泌む快さ

出て行くところもあらし門過ぐる人など見つ
さしぐみてあり

何事も深くとがめて相寄らむかゝる縁縁をただあ
はれまむ

淋しさも煩はしさもともなはぬ戀はあらぬか戀
はあらぬか

いと強き男性おとこの情味ふが如く眞夏の陽をばみつ
むる

戀しさに君戀しさに瘦せにける腫にしみていた
き夏の日

しみじみとおのれ可愛ゆくなりにけりかばかり
君を思ふおのれか

あまりにもなげきつかれて離別わかたる悲しみをさ
へ覺えずなりぬ

灯を細めて

今宵もまた病める女のかたはらにおとなしふ寝
にかへりたまひぬ

我がまこと足らざるかはた汝がまこと足らざる
かこの戀のはかなさ

いとせめて思ふ男と十年ほど添ふ我を見て逝き
もせば亡母

亡き母を憶ひ泣くのみ君置きて誰をばしのぶ我
にかあらん

君戀ふる心のかげに亡母憶ふ稚き情つねにひそ
める

すべて身も心も投げてすがらんと願へども救ふ
ものゝ來らず

我が許へまことふたゝびかへり來し君かやすこ
し面變せる

この淋しき人の世を行く道づれとなりてたまへ
や戀ならずとも(或人に)

何事を君おもへるやかたはらに黙して我は蟲の
音を聞く

うれしさかゝなしさかはた知らねどもつとより
添ひてさしぐみにけり

つとゝりし手のつめたさよ再會の秋の夕の風う
らがなし

我が宿に夕秋風の訪ひ來れば遠き旅宿にあるご
とさびし

枕邊に近き蟲の音止みもせん灯をば細めて低く
語らん

さしなれしつげの小櫛も前髪に冷たさ泌みて秋
深みけり

我がためになげき呉るゝもふたつみつあるらん
しげき蟲のもろごゑ

かすかなるひびきをたて、秋の夜の欄干てすりをすべ
る細き金簪

我が袖の菊のもやうの濕るまで君が涙を拭ひけ
るかな

絶えてはまたはてなく續く秋の夜のこほろぎの
音と汝ながすゝりなくなげき

なげき

かの子よ汝が枇杷の實のごと明るき瞳このごろ
やせて何かなげける

かの子よ汝が小鳥のごときさへづりの絶えてい
やさら淋しき秋かな

かの子かの子はや泣きやめて淋しげに添ひ臥す
雛に子守歌せよ

やふやくになだめこゝまでつれて來ぬかの子よ
 またもふりかへらざれ
 幾度か我と我が身をなだむれど聞きわけもなく
 なげき沈めり
 この日頃なげきのみする我が傍に婢よいかばかり
 淋しがるらん

愛のなやみ 下巻終

大正七年一月廿五日印刷
 大正七年二月十日發行

定價金六拾五錢

かの子の集
 愛のなやみ
 第二編

著者 岡本かの子
 發行者 西村寅次郎
 印刷者 長尾正人
 東京市日本橋區檜物町九番地
 東京市神田區中猿樂町十七番地



發行所

東京市日本橋
 檜物町九番地

東雲堂書店

電話本局一八七一
 振替東京五六一四番

岡本かの子著

(絶版)

かの子集
第一編

かろきねたみ

總木版刷
和装美本
全壹冊

岡本一平氏装幀

和田英作氏畫

吉田耕民氏刻

女史の近作七十首を集めたり。熱く
優しくなつかしき女史の情緒は、頃
合の櫻の板に淡墨のにじみ勝にも
つつましく刻られたり。

